

建物を楽しむために

【建物を見るコツ】

古い建物を見るだけで楽しいものです。

例えば、予想もしない場所で素敵な洋館に出会った時。また細い路地の先にノコギリ屋根の大きな工場が続いていた時。いつもの街並みからは想像もできないところでそれらの建物を見つけた時は、まるで大切なたからものを手に入れたような気分になります。

建物を楽しむ手段はひとそれぞれ、ことさらに見方を促す必要もないのですが、あえてガイドラインを紹介するなら以下のようなようになるでしょうか。

まず、建物の周りの状況を眺めてみる。なぜそこに、この建物がたっているのかを探ってみます。眼の前の道や周囲の街並みがヒントになるかもしれません。

それから、建物をじっと見つめてみる。目から伝わる情報は、人間の知覚のかなめです。最初は感覚でもいいです。ああ、優しい感じだな、とか、なんだか恐ろしいな、とか。そうやって、建物の雰囲気を感じてみてください。

とはいえ、相手は大きな建物です。上手いかわからないかもしれません。その時は、ディテール(細部)を目で追いかけてみてください。優しい感じはタイルの色味が理由かもしれませんが、恐ろしい感じは、古い柱の今にも崩れ落ちそうなようすが原因かもしれません。

建物の雰囲気を味わえるようになったならあと一息です。そこから、建物の辿ってきた物語へ想像の翼を広げてみましょう。建てられた年代や、様式やデザイン、構造の種類などの専門的な知識があれば、よりリアルに想像することができます。所有者やガイドボランティアから話を聞くことも、きっと役に立つでしょう。

建物を理解するうちに、その建物がいつのまにか大好きになっていけば、あなたはもう立派な建築マニアです。

【近代建築について】

ところで、本書に登場する建物のうち、近代建築というくりに紹介されているものがあります。特徴としては、機能に即したかたちを追求した建物、ということができると思います。

例えば工場は、広い空間で効率よく機械を置くために構造を工夫し、鉄骨造や鉄筋コンクリート造の大空間がそれに応えました。その点では、木造トラスの蔵やノコギリ屋根も近いところがありますが、鉄骨や鉄筋コンクリートはそれとは比較にならない広いスペースを手に入れられたのが画期的でした。

また近代建築のデザインを昇華させたのが、巨匠と呼ばれる人々です。フランスのル・コルビュジエや、ドイツからアメリカに渡ったミース・ファン・デル・ローエ、同じくアメリカにはフランク・ロイド・ライトがいました。彼らが探求した近代建築の新しいかたちは、世界中を席卷しました。

【建築マニアの嗜み】

本書で紹介する建物について、以上のことを意識しながら読んでいただければ、その良さがより伝わるのではないかと思います。

最後に、建物はそれを使用し管理する所有者がいて、はじめて姿を保つことができます。見学する際には、建物へのいたわりの心を持って、大切に扱きましょう。また、中には見学のできない建物もあります。そういった場合は無理をしないこと。じっくり機会を待てばいつか見ることができる、その日を信じて無茶をしないことも、建築マニアの嗜みなのです。

窯業

窯業とは、土や砂などを窯で焼成して、茶碗や皿、レンガやタイル、土管、碇子などを製造する産業。愛知では瀬戸や常滑を中心に、古くから営まれてきた。



photo: Hisao Takeuchi

スクラッチタイルの風合いが美しい外観。それぞれの面で表情が異なる。壁面に浮かぶ装飾が楽しい

名古屋陶磁器会館

黄色いタイルが美しい、名古屋の誇る昭和レトロ建築



玄関ホール。当時のままの内装

昭和初期のレトロ建築

名古屋陶磁器会館は、黄色いタイルの古びた風合いが美しい近代建築です。名古屋城から東へ約2キロ、国道19号線から少し奥まった場所にたっています。

このあたりはひと昔前まで、陶磁器に絵付けをする工場や商店、それを生業にする人々の長屋がひしめく加工生産地でした。明治の終わり頃、瀬戸や多治見などの生産地と近郊の大曾根駅や千種駅がつながり、そこから素地となる陶磁器の仕入れが容易になったのが理由です。絵付けをされた陶磁器は、堀川か

滲み出る想い

名古屋陶磁器会館は、すっかり変わってしまった当時の街の面影を、今に伝えていきます。それは、同館を管理する事務所や、ここにオフィスを構える店子によって大切に守られ続けてきました。戦後に増築された3階部分も、建物の雰囲気を変えないように注意が払われています。

そういった想いが館内を満たし、風合いを帯びた姿とともに、この建物を美しく彩っているのです。



2階大ホール。木製の床に光が射し込む

ら名古屋港を通じてアメリカやアジアなどへ輸出されました。その最盛期に組合事務所として建てられたのが、名古屋陶磁器会館です。

タイルのデパート

外観を特徴づけている黄色いタイルは常滑で生産されたもので、スクラッチタイルと呼ばれています。よく見ると、引っ掻いた跡がめくれたような表情になっています。手作業で製

作されたため、同じ形のものはありません。タイルは建物の全体を覆っていて、隅部や窓まわりには役物という特注品で仕上げられています。このように、全体をひとつの塊のようにデザインしたのは、ドイツ表現主義建築に影響を受けたからと考えられます。

また、1階正面の半円窓や、コーニス(軒)やマリオン(方立)など立体感のある造形、軒下の装飾は、同じく当時注目されていたアール・デコに通じるデザインを思わせます。名古屋陶磁器会館は、建設当時の美しい内装を多く残しているのも特徴です。玄関ホールには、スタンドグラスと古い照明が灯り、床にはダイヤという古いタイルが当時のまま残っています。

また、旧応接室の壮麗な漆喰天井や、2階大ホールの浅いヴォールト天井と趣のある木製の床、モザイクタイルの張られた階段室と大窓など、館内はレトロな雰囲気であふれています。そのため、映画「三丁目の夕日」やドラマ「負けて勝つ」の舞台にも使用されました。

1階の展示室には、かつて名古屋で製作されていた陶磁器などが展示され、名古屋デコ盛りという特色ある装飾技法のワークショップも開催されています。



大窓のついた階段室。黄昏時は格別

1932年(昭和7年)
鉄筋コンクリート造2階建て(一部3階)
[設計] 鷹栖一英・丹羽英二(実務設計)
愛知県名古屋市東区徳川1-10-3
<http://nagoya-touzikaikan.org>



photo: Sayaka Ito

旧館の大会議室。戦後、陶磁器産業を左右する国際会議が開かれた歴史的な場所

日本陶磁器センター

ふたつの建物が絡み合う、レトロとモダンが共存する空間



裏通りに回ると見えるスクラッチタイトルのレトロな旧館

新・旧ふたつのレトロ建築

日本陶磁器センターは、複雑な経緯をもった興味深い建物です。それは、昭和9年に建てられたレトロな旧館と、昭和33年に建てられたモダンな新館が連結され、それぞれの空間が絡み合って共存していることに起因しています。

これには事情があります。戦後、名古屋の都市整備で旧館の前の道路が拡幅されることに

建物の1階にはイタリアンレストランが入り、新館と旧館を連結させた魅力ある内部空間になっています。また地下のワインセラーも見所の一つで、構造以外を自由に改変できる近代建築の特徴を巧みに利用しています。

建物が現すもの

旧館の大会議室は、戦後の陶磁器産業を左右する重要な国際会議が開かれるなど、歴史的な舞台ともなりました。

日本陶磁器センターの複雑で玄妙な佇まいは、そんな激動する時代に对应してきた陶磁器産業の歴史と重なる見えます。



新館地下のワインセラー

旧館について

旧館は、日本陶磁器工業組合連合会共同販売所として建設されました。いわば全国の陶磁器産業の組合事務所で、名古屋がその中心地だったことを物語っています。

建物の外観にはスクラッチタイトルが全面に張られ、ヴォリュームを意識した表現主義的な構成は、名古屋陶磁器会館とも通じるデザインです。設計と施工を担当した志水建築業店は、直前に同会館の施工に携わっています。

館内には古い設えが残り、2階の貴賓室には床の寄木細工や大理石のマントルピース、天井の漆喰細工が、また3階の大会議室には、ステ



旧館大会議室前のホール



新館の外観

新館について

一方の新館は、モダンデザインを強く意識した建物です。校通に面して水平に連続する窓が大きく開かれ、屋上には庇(現存せず)と建屋、1階はピロティ風の開放的な空間にするなど、近代建築の巨匠ル・コルブジエの作風を思わせます。以前の外観は白いタイトルが張られ、よりコルブジエ風の建物でした

が、現在は赤茶色の外装になっています。

【旧館】1934年(昭和9年)

鉄筋コンクリート造3階建て(一部4階)地下1階

【設計】施工 志水建築業店(設計担当 藤田進)

【新館】1958年(昭和33年)

鉄筋コンクリート造5階建て地下1階

【設計】山下 寿郎設計事務所

愛知県名古屋市中区代官町39-18

http://www.toujiki.org/

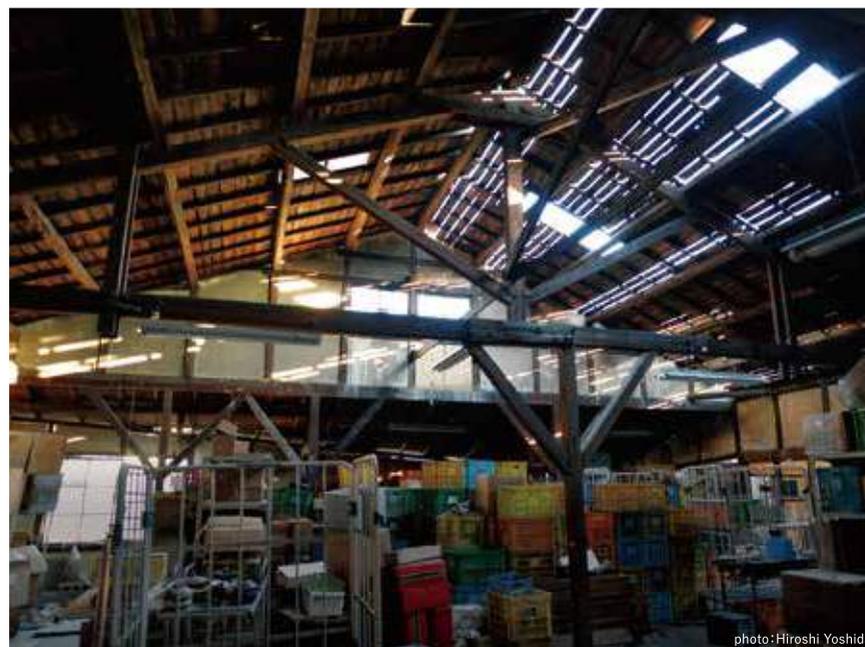


photo: Hiroshi Yoshida

奥倉庫内部。台風で飛ばされた屋根の隙間からドラマチックな光が射し込む

旧山繁商店

瀬戸の最盛期に建てられた、貴重な商店建築



離れの便所

窯業の街、瀬戸

名古屋の近代陶磁器産業を支えていた瀬戸は、古くから窯業で栄えた街です。

良質の土が得られ、瀬戸川を軸に丘陵地を利用した登窯などの窯場が築かれていた瀬戸は、明治以降の陶磁器産業の拡大とともに多くの工場が建てられて、大いに発展しました。最盛期には工場から上る煙で空は真っ黒だったといえます。

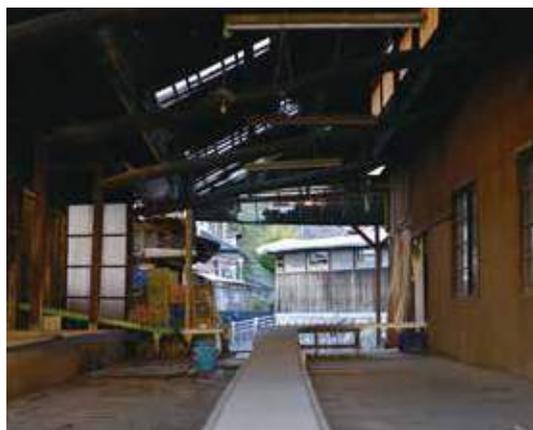
今では黒煙を上げていた工場も姿を消し、窯業を営む人々も減って、街に残るレトロな商店街が当時の面影を偲ばせています。

旧山繁商店は、そんな瀬戸の最盛期に財を成した商店の遺構です。

と、それをきっかけに一気に老朽化が進んでしまします。

現在、そんな状況にある旧山繁商店の建物たちを、瀬戸市と学識者、ボランティアが協力し合い、活用の道を模索しています。

愛知の陶磁器産業の一翼を担った商店の貴重な遺構が、今後どのように保存活用されていくのかが期待されています。



新事務所から倉庫越しに旧道方面を見る。正面に見えるのが離れの塀

名士加藤繁太郎とその商店

山繁商店は、旧名を山繁陶磁器商店といい、明治19年頃に創業された卸問屋です。創業者の加藤繁太郎は、瀬戸銀行や瀬戸自動鉄道株式会社の創立にも関わった実業家でもあり、当時の取引先は樺太から大分までほぼ全国に展開されていました。また3代目繁太郎は販路を海外まで広げ、後に瀬戸市長も務めました。

旧山繁商店には、現在、建物と塀が9棟残

されています。丘の中腹に位置する敷地は、かつて大型の窯場や卸問屋のある地区でした。また、不整形な敷地の中で増築し続けたため、複雑な配置となっているのも特徴です。細くくねった旧道沿いには離れと旧事務所を構え、その先に倉庫が4棟、軒を連ねています。さらにその奥には、昭和になって開かれた道(池田通り)に対して門が開かれ、新事務所がたっています。また、離れに隣接していた主屋(現存せず)の背後には、趣のある土蔵が行んでいます。

明治22年に建てられた、影盛された鬼瓦が載る寄棟屋根の離れは、瀬戸内外の要人をもてなすゲストハウスとして使用され、皇族もここを訪れました。緻密な石垣の塀や、雅な意匠の便所などに、その気分を感じることができます。また2階の茶室は、皇族来訪の折に改修されたと考えられています。

その他、商店の顔だった新・旧の事務所や、トタンで置かれた屋根が連なる倉庫群からも、往時の繁栄していたようすがうかがえます。

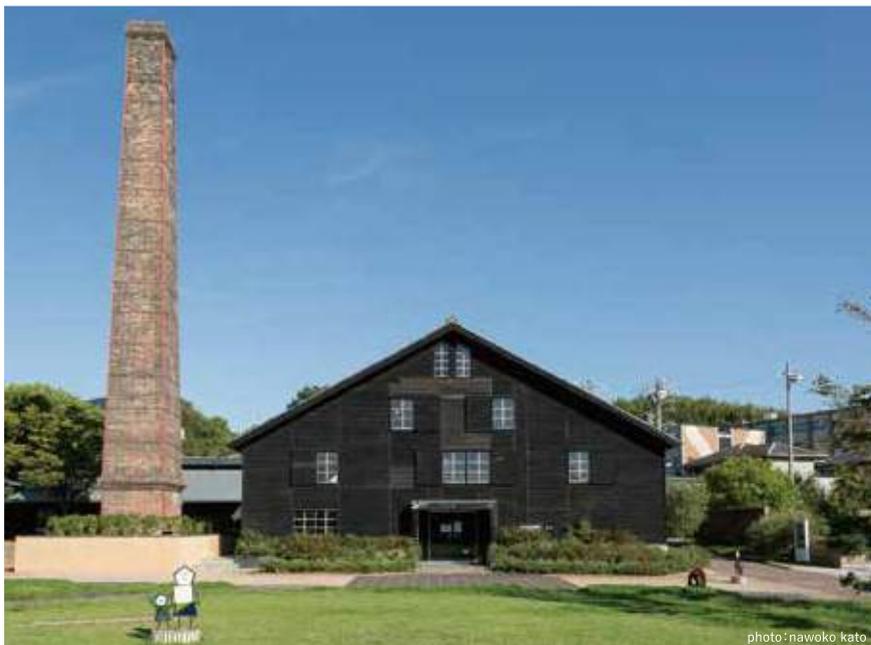
進む保存活用計画

管理する人のいない建物は傷みが早く、特に台風などの自然災害で大きな被害を受ける



土蔵。以前はこの前に主屋がたっていた

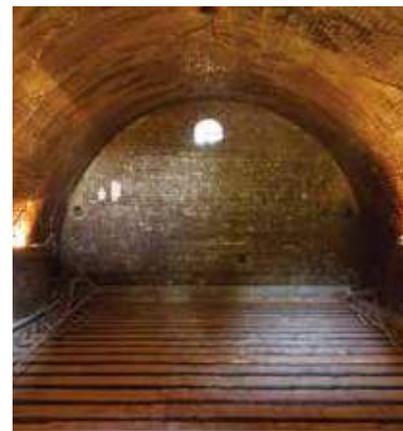
離れ / 1889年(明治22年)、塀 明治中期
土蔵 / 1903年(明治36年)、
旧事務所・新小屋 / 1914年(大正3年)、
新事務所・中倉庫 / 1947年(昭和22年)、
前倉庫 / 昭和前期、奥倉庫 / 1950年(昭和25年)
【設計】不明
愛知県瀬戸市仲切町23他



煙突と建屋を見る。2棟は地下の煙道でつながり、煙突から排煙する。レンガの煙突と黒い下見板のコントラストが美しい

窯のある広場・資料館

赤い煙突と黒い建屋が並ぶ、近代常滑の風景



鉛色に輝く窯内部の風景

タイルの聖地

INAXライプミュージアムは、世界のタイル博物館をはじめ、ワークショップの建物や研究施設もある「タイルの聖地」として全国に知られています。同博物館には世界各地の貴重なタイルが展示され、5500年の歴史を一望できるのも魅力です。

その一角に、大きな屋根に黒い下見板の張られた建物と、高さ21mのレンガの四角い煙突が並んでいます。現在、窯のある広場・資料館として、常滑の土管の歴史を紹介しているこの建物は、もとは土管を焼成するための大型の窯と建屋でした。



窯の上部。鋼材（レール）とワイヤーでトンネルの広がる力を締め付ける

窯というタイプで、幅5.5メートル、長さ11メートル、高さ3.4メートルのレンガでできた分厚いトンネル状のかたちをしています。そこに大小様々の土管をぎっしり並べ、窯の側面の焚き口から石炭をくべて焼成します。また、窯内にまんべんなく熱を回すため、床下の煙道から煙突へ排煙できるようにになっています。煙突が高いのも吸引力を強める工夫です。

建屋の2階と3階（現存せず）では、窯の熱を利用して素地の状態の土管を乾燥させるスペースが設けられていました。現在のような高精度の機械がない時代に、建物全体をシステムとして連動させたしくみがとても興味深いです。

ところで、2階に上って窯を見ると、鋼材が外側に並んでいることに気がつきます。これはトンネルを外側から鋼材とワイヤーで締める工夫で、鋼材には鉄道の古レールを使用しています。レールは外国製のものが多く、その頃の日本では鋼材の製造が難しかったことを物語っています。

窯と建屋と煙突

常滑は古くから焼き物で知られた街で、大型の甕や壺をつくっていたことが、明治以降の土管の製造につながります。横浜で初めて布設された下水道土管や、鉄道用土管、暗渠排水用土管など、大正11年には約500万本を製造し、全国各地で使用されました。

窯のある広場・資料館の窯と建物も、ちょうどその頃に建設されています。窯は倒焰式角

本場のミュージアム

かつて常滑では、レンガの四角い煙突が立ち



土管の製造に使われた道具の並ぶ展示風景

1921年(大正10年)
建屋／木造3階建て 煙突／レンガ造
〔設計〕不明
愛知県常滑市奥栄町1-1-30
※2019年秋まで改装工事